

ラオス南部の農村にある豊かさ ～地域振興手段としての一村一品運動～

キーワード

ラオス 国際協力 開発 一村一品運動 ODOP OTOP 地域振興 貧困削減 社会開発 伝統 文化 コミュニティ 農村
開発 村落開発 質的調査

国際協力学専攻 47-116781 西岡 悠美子
指導教員氏名 山路永司教授

I 研究の背景

1.対象国の現状

ラオス人民民主共和国(以下、ラオスと記す)は「2020年の最貧国脱却」という目標に向かって邁進している。2006年から2010年までの平均GNP成長率は7.9%となり、1人あたりGDPは1,000ドルを超えた。2006年3月に開催されたラオス人民革命第8回党大会では「自然経済から商品経済への移行?」というこれまでの経済開発に一区切りを付け、工業化と近代化を達成する新たな段階に入ったとの認識を示した(山田紀彦、2011)

2.ラオスにおける一村一品運動

ラオスは近年世界貿易機関(WTO)加盟に向けた取り組みを始めるとともに、2007年8月にはASEAN全体として日本とのEPA(経済連携協定)を大筋合意するなど、グローバルな市場経済への統合過程にある。2003年から2005年には国家経済研究所(National Economic Research Institute:NERI)を主要実施機関として、ラオスが地域経済への統合を円滑にすすめるための政策策定に向けた調査研究であるJICAのマクロ経済政策支援プロジェクト(Macroeconomic Policy Support for Socio-Economic Development in the Lao PDR: MAPS)が実施された。MAPSのなかで、一村一品運動は、潜在的輸出産品を掘り起こし、地域経済を活性化するための重要な取り組みであるとともに、農村における地場産業活性化と農村生計向上のための施策のひとつになるとして取り上げられた。(国際協力機構ラオス事務所、2008)

3.サバナケット県及びサラワン県における一村一品プロジェクト

ラオスの国土は8割が山岳地帯であり、人口が少なく(2006年統計で575万人)人口密度が低いため、他のアジア諸国がとったような労働集約的な開発、工业化を真似ることは難しい。その豊富な自然資源を有効利用し、豊かな自然環境を保ちつつ開発を進め、近代的な技術を導入するだけでなく、現存する技術、伝統的な知恵を利用した開発も一手段であると

して、大分県の一村一品運動がMAPSフェーズIで取り上げられた。

MAPSで調査研究を進めるなかで、ラオス側はラオスにおいては「One District One Product:ODOP(一村一品)」の名称を使用することを決定した。(国際協力機構ラオス事務所、2008)

II 先行研究の整理

1.論争と傾向

一村一品運動の事例研究としては、大分・タイ・マラウイ・モンゴルでの一村一品運動の調査が現在までに存在している。

これらとラオスの例を比較する際、大分県のように草の根主導型で、地域の人々のアイデアや自主的な取り組みを行政が支援し、もの作りを通して地域の人材を育成し地域開発を実現するのか、タイのOTOPのように、政府主導で商品そのものの自体の開発、企業家育成を主眼とするのか、「これら他国の例を参考にして作られるラオス型ODOPのモデルはどのような形になるのか」という問題提起はされているものの、関係者間で合意形成がなされていない。(松井和久・山神進、2006)

III 研究目的と方法

1.問題意識と着眼点

ラオス南部の開発に対して持つ問題意識1と、中でもその手法として、ラオス南部のサバナケット県・サラワン県において用いられている開発手法である、一村一品運動に対して持つ問題意識2について述べる。

問題意識1: ラオスやイサーン(ラオス南部地域と民族、経済状況が似ている東北タイ)の農民は物質的に豊かでないがそれを良しとし、それ以外の何かを大切にす価値観を持つ民族であるという発言への興味。精神的に豊かな「何か」とは一体何のこと

となのか、明確に述べている人がいないことが気になった。

問題意識 2: ラオス型一村一品運動の確立が JICA によるプロジェクトが始まって既に 6 年経過しているにも関わらず、未だに成されていないこと。

ここまで述べてきた通り「ラオス南部の開発における社会面(特にラオス人の心を豊かにしているとされる文化や伝統、そして人との繋がり)への一村一品運動のインパクトの有効性を検証し、ラオス型一村一品運動のあるべき姿を提言すること」が本研究の目的である。その為に、下記の視座をもち研究を行った。

1. 民族: 多様な民族(ラオ族、カトゥ族、タオイ族等) ラオス南部の開発を通じラオス人の開発に対する価値観を知る為には、ラオス国の人口の半数以上を占めるラオ族と、国内に 40 以上存在する少数民族の両方を対象に入れるのは必然的なことであると考えた。

2. ODOP 商品・観光向けサービス、商品 ODOP の社会的インパクト(ここでは特に伝統継承)に有効であるという先行事例で挙げられている一村一品は、歌・音楽・踊り・郷土料理などの観光向け商品やサービスである。ラオス南部においても、これらの成功事例と同じく観光向けサービス、商品を対象に ODOP の有効性の検証を行うことで、先行事例との比較による分析が可能になり、より明確な結論を導き出せると考えた。

2. 研究手法

質的調査による社会面に着目した有効性の検証 ODOP に関する研究はもっぱら技術面及び、経済面に関するものが多く、小農の社会面におけるインパクトをテーマにしたものは限られている。そのため、本研究では、質的な調査方法を駆使し、社会面に着目した検証を行った。

3. 調査手法

2 度の現地訪問によるインタビュー調査と参与観察、その他専門家等により集められたデータの分析。

2012 年 9 月 11 (火) - 19 (水) 予備調査

2012 年 9 月 20 (木) - 26 (水) 中間発表

2012 年 12 月中旬 第二回調査 ※専門家等実施

2013 年 1 月初旬 本調査・執筆・論文提出

2013 年 2 月 発表

■参考文献

横山智(2001)「農外活動の導入に伴うラオス山村の生業構 変化-ウドムサイ県ボンサワン村 を事例として-」『人文地理』第 53 巻第 4 号 新井綾香(2010)『ラオス 豊かさと「貧しさ」のあいだー現場で考えた国際協力と NGO の意義』松井和久・山神進(2006)『一

村一品運動と開発途上国ー日本の地域振興はどう伝えられたか』 アジ研選書 独立行政法人国際協力機構 アフリカ部南部アフリカ第一課(2009)「JICA の進める一村一品運動」『JICA アフリカ部南部アフリカ第一課長下田透氏講演議事録』高梨和紘(2008)「タイ東北部における OTOP の現状」平松守彦(1982)「一村一品のすすめ」独立行政法人国際協力機構ラオス事務所(2008)『ラオス人民民主共和国サバナケット県及びサ ラワン県における一村一品プロジェクト事前評価調査報告書』独立行政法人国際協力機構ラオス事務所(2008)『事業事前評価表(技術協力プロジェクト)』Web サイト 2013 年 12 月、1 月アクセス 平成 23 年在 ラオス 大使館 16. チャンパスック県 http://www.la.emb-japan.go.jp/jp/content_japan_laos_relations/laos/16champasak.pdf PTP 株式会社 NGO クワトロ 高橋義明 2012 Policy Making「生の質」セッション内のワークショップ「Increasing people's subjective well-being(主観的幸福度の向上)」Subjective well-being as a policy tool ラオス公式民族分類の 3 系 <http://www.mekong.ne.jp/directory/culture/laosminz-okukousyou.htm> NPO 法人大分一村一品国際交流推進協会 http://www.ovop.jp/jp/ison_p/haikai.html 外務省 Web サイト TICAD IV 年次進捗報告書 2008 年版 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/ticad/report/status/PR000104.html> プロジェクト基本 http://gwweb.jica.go.jp/km/ProjectView.nsf/VIEWAL_L/020D313E1F1D6CCF492575D100354B78?OpenDocument One District One Product in Laos <http://www.odop.info/> Wikipedia ラオス <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A9%E3%82%AA%E3%82%B9> ラオス人民民主主義共和国 貧困プロフィール調査(アジア)最終報告書 http://www.jica.go.jp/activities/issues/poverty/profile/pdf/lao_02.pdf Wikipedia 結い <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B5%90>